

#### 4. 予想を上回る「歩け方式」の成果

##### 初めて一年生を教える

学校で一年生を受持ち、帰宅しては一年生のわが子と語る……。これなら、一年生を受持った経験のない私

にも、なんとか人様の子供を預かって、教育することが出来るのではないか、という考えでした。確かに、これは良い考えだったと思っています。大した間違いもしでかさずに、曲りなりにも勤めて、子供たちの両親から感謝されるくらいに子供たちを教育し、三年生を終えるまで受持つことが出来たのは、何よりもこのお蔭ではなかったかと思っています。

しかし、それにしても、一年生を受持つということは、なんと大変な仕事でしょう。50人が50人、皆違った性格を持っている子供たちが、それぞれ違った行動を思い思いに始めると、さあ大変。最初の一週間というものは、まったく途方に暮れたものでした。

その上、学校が戦災に遭い、教室が足りないために二部授業をする、という不利もあって、午後から勉強を始める日など、遊び疲れてか

ら学校にやって来る子供たちを教えることは、なかなか大変なことでした。

しかし、それでも、五月、六月と、月日の経つにつれて、子供たちも成長し、また、私も指導のコツが解って、学習もすらすらと進むようになりました。

##### 目標の七倍に成功

私は、初め、一年生を終えるまでに、およそ200字の漢字を教えて、そのうち、150字ぐらい覚えさせたい、と考えていました。

ところが、二学期の終りから三学期にかけて、子供たちの学習はとんとん拍子に進みましたので、初めの予想を大きく上回って、教えた漢字は300字を超え、覚えた漢字も、200字を超えていました。

一番良かった子は、教えた漢字327字のうち305字を覚え、一番悪かった子でも、63字覚えました。クラスの平均は203字。つまり、当時の学習指導要領での目標である30字の、およそ7倍に近い漢字を覚えたわけです。何よりも嬉しかったことは、一番成績の悪かった子供でも、文部省(現文部科学省)の目標の二倍を超えていたことです。

この子供たちが三年生になった時には、子供たちの使っているノートや作文を見た先生たちは、異口同音に、「六年生もとても敵いません」と言って、褒めてくれるほどになりました。

### あらゆる実験を試みる

このすばらしい結果は、「漢字が易しい文字であること」、少なくとも「一年生にとって、漢字は難しい文字ではないこと」

を証明したものであり、「歩け」式指導方式が正しかったために、この良い成績が得られたことを、私は確信することが出来ました。

私は、自分が正規の小学校教師としての教育を受けておらず、そのため、指導技術も未熟であることを、十分に自覚していました。ですから、普通の先生方がこのやり方で教えたら、もっともっとすばらしい成績が納められるだろうと、確信していました。

ところが、先生方はそうは考えてくれなかったのです。

「元指導主事の石井先生がやったから、成績が良かったのだ。一般にだれでもやれるという方法ではないのだ」

こういう声が、私の耳に聞えてくるのです。しかも、こういう批判があ

まりにも強かったので、つい私も、「自分の指導技術はうまいのかもしれない」といううぬぼれ心も出て来て、

「このすばらしい成績が、すべて、『歩け』式指導方式による結果である」と言い切る自信が、少しくらついてきました。

「よし、もう一度一年生から、今度は、『あるけ』式指導方式でやってみよう。そうすれば、『歩け』式と『あるけ』式と、どちらがどれだけ勝れているかが、はっきりと判るだろう。そこまで確かめてみなければ、実験としては不完全なものだ」

こう考えた私は、再び一年生を受持とうと決心しました。

### コラム

## 部首 己

曲りくねった糸の象形。糸の先端を表していることから“はじめ”。

「紀」の本字。「自己」などと使われているが、これは仮借。

【紀】 己が“おのれ”の意味で使われるようになったため、“糸の先端”を表す糸と己の会意形声字。

【記】 糸すじの意味の己と言との会意形声字。“言葉を糸のように長く続ける”。言葉を整理し順序立てて、“書き記す”こと。